

## 医師の定年について考える

茨城県保険医協会副会長 福田 潔

平成も最後の年となりました。3月31日付けで筑波大学を定年（医学系教官は65歳）退職いたしました。昭和55年3月に筑波大学を卒業後、いろいろな病院勤務をいたしました。あつという間の39年間で、最後に母校の教官であったことは幸せなことだと思っています。医師、歯科医師等の有資格者は、特権として自分の定年を決めることができる立場にあると思ってきましたので、定年について真剣に考えていなかったのですが、1年前に大学から定年と継続雇用がない旨の通達を受けた時は、大学の教官ってサラリーマンと同じなんだと思いました。

私の両親は東京都の小学校の教諭で、父は60歳で定年、母は父の定年後も働いていましたが、「何でお父さんが家に居るのに私が働かなければいけないの?」と思って57歳で早期依願退職しました。大正末期～昭和初期の両親にとって人生60年、定年後はおまけの人生の時代でしたし、年金も60歳からもらえ、2人働いていましたので年金で十分な生活ができていたようです。ただし、両親とも思いもよらず長生きで、父は92歳で他界しました

が、母は現在88歳で高度の認知症ですが施設に入所しています。そのため、自宅の維持費と母の入居費は年金の範囲を超えてしまいました。

現在の私を考えると、共済年金と厚生年金合わせても父の年金額の6割程度しかなく、介護保険料も増え、年金生活などという時代でないことを痛感しています。年金制度破綻とまではいわないものの、公的年金では不十分で自己防衛が必要で、手前味噌ではありますが保険医年金制度の必要性が大であると思います。

この一年、医師の定年についてさまざまな立場の先生とお話してきましたが、「70歳までは頑張ろうぜ!」と言った元気な勤務医も多く、病院によって60歳、65歳、70歳と定年はさまざまで、その後は嘱託として1年毎の契約更新にて勤務されている先生方が多いと感じました。当然週2～3日のフリーのアルバイトもありでした。給料は現役時代に比べ何割かカットされるのが通常なのですが、仕事内容は継続されるので、体力的問題以外はストレスも少ないのが良いとのこと。しかし、元気な先生では、仕事量も変わらないのに給料カットはけしからんといった不満の声もありました。

一方、開業医の先生方かというと60歳代ではあまり身近な問題ではないようですが、70歳代になるといつ辞めるかよりも、後継者の問題や、患者さんが付いている先生では閉院への戸惑いといったストレスも強く、自分で定年を決められるといいましたが、私たちの職業はさまざまなしがらみの中で生きている現状がよくわかりました。ちなみに私は4月1日より筑波学園病院にお世話になっています。